

オリンピック出場権のかかる世界大会で選手に力を発揮させようと、ビジネスクラスで大会に向かいました。その結果、団体で4大会ぶりにメダルを獲得し、ついにアテネオリンピックでの団体金メダルをとることができました。選手を第一に考えた、協会のウルトラCと言えるでしょう。

## ●環境対策

### ■器具・床

体操の事例が続きます。体操のオリンピック対策は充実していました。体操では、鉄棒や鞍馬、床、平行棒、つり輪と、様々な器具を使用します。実は、大会で使用される器具は同じメーカーとは限りません。メーカーが違つと、例えば鉄棒の「たわみ」や、床の「弾力」がこととなります。そこで、世界選手権とオリンピックでは、大会で使用されるメーカーの情報をいち早く入手し、全く同型の器具のすべてを購入して練習を行いました。その総額はそれぞれ1000万円と500万円と言います。体操団体の鉄棒で、各国が着地や鉄棒のキャッチを失敗する中、日本チームが完璧に演技できた背景に、このことがあることは間違いないでしょう。

柔道においても同様のことがあるようです。畳は世界で同じ規格という訳ではなく、表面の摩擦が異なります。摩擦によって足技がやりやすい、寝技で逃げにくいなどの影響があるそうです。オリンピックでも会場で畳の具合を確かめる選手も多数見られました。

### ■練習環境

シンクロチームは、練習場所に工夫をしています。2つの例を紹介したいと思います。

シンクロは今回、屋外プールで行われました。また、アテネは大会時期にはメルテミと呼ばれる強い北風が吹きます。普段シンクロでは屋内プールで練習をすることが多いのですが、大会と同様の環境に慣れるために、アウトドアで風の強いプールを持つホテルを合宿地として練習を行いました。このようなことは、何もアテネオリンピックに限ったことではなく、シドニーオリンピックの際にも、その会場よりもさらにスケールの大きい会場で練習を行い、「シドニーの会場は狭い」と選手に言わせるほど環境に慣れさせたそうです。

もう一つの工夫は、人前で練習をしたということです。シドニーオリンピックでの話ですが、選手村の他国の関係者が多数通るような場所を選び、そこでシャドートレーニングを行いました。日本人以外に見られることに慣れること、自分たちの演技を日本人以外に楽しませることなど、様々な意味があるコーチは話していました。

大会会場で、その会場のスケールや観客に心を乱されてしまい力が発揮できなかったという話は良く耳にします。しかし、ちょっとした工夫が本番で最大のパフォーマンスを発揮できることに繋がるのではないのでしょうか。



## ●選手団の年齢構成

今回メダルを獲得した選手の多くに、シドニーオリンピック経験者がいることがわかります。競泳の北島選手、山本選手、中西選手、陸上の室伏選手、柔道の阿武選手、上野選手など、シドニーでメダルを取れなかった。あるいは金メダルを逃した選手がアテネで飛躍したことがわかります。その他でメダルを獲得した選手もたくさんいますが、その選手たちは世界選手権などの国際大会を経験しています。つまり、オリンピックをはじめとする国際大会の舞台に立った経験があることが、今回の大会での活躍に繋がっているのです。これはオリンピックに限らず、野球の甲子園やインターハイ等でも同様で、初出場のチームはなかなか初戦突破をできないことがそのことを物語っています。

試合でいつものパフォーマンスを発揮できなかったことを、「精神面が弱かった」と評する